【方法】対象は40歳未満の脳血管障害26例（男性14例，女性12例）で，CTと脳血管写を施行し，危険因子（高血圧，糖尿病，高脂血症，心疾患，喫煙，飲酒）の有無を検索した．

【結果】20～29歳では，9例中梗塞7例，TIA 1例，出血1例で，心疾患6例中5例にmitral valve prolapse（MVP）を認めた．30～34歳では，5例中梗塞4例，モヤモヤ病2例，fibromuscular dysplasia 1例で，心疾患2例中1例にMVPを認めた．35～39歳では12例中梗塞8例，モヤモヤ病2例，出血2例で，心疾患2例中1例にMVPを認め，高血圧，糖尿病，高脂血症，喫煙，飲酒を有する例が5例認められた．

【結論】①20～29歳では心疾患に基づく脳塞栓，30～34歳では心疾患と血管奇形，35～39歳では動脈硬化の危険因子を有する脳血栓が多く認められた．②脳塞栓症の10例中7例はMVPを有していた．

15. 上部尿路結石に対する非観血的治療

（腎センター外科）
○中村倫之助・木原　健・合谷　信行
東間　紘・阿岸　鉄三・太田　和夫

近年，上部尿路結石に対する外科的治療は大きな変革の時期を迎えている．それは従来行なわれてきた観血的治療，すなわち手術療法に代わり，非観血的結石摘出法の進歩を示している．現在非観血的治療には2本の柱がある．

1. Endourology

a）Percutaneous nephrolithotripsy（PNL，経皮的腎砕石術）

経皮的に腎瘻より内視鏡を挿入し，超音波，電気水圧衝撃波など結石を破砕し摘出する．

b）Transurethral lithotripsy（TUL，経尿道的砕石術）

経尿道的に膀胱，尿管口を経て尿管内に内視鏡を挿入し，砕石する．

2. Extracorporeal shock wave lithotripsy（ESWL，体外衝撃波砕石）

体外において発生させた衝撃波を体内の結石に伝播集束させ，結石を破砕し，自然排出させる．

当科，および城西クリニックにおいて行なわれている．PNL，TUL，ESWL治療の現況を報告する．

16. 食道癌術後挙上胃管に発生した胃癌の2例

（第二病院外科）
○小川　智子・矢川　裕一・小川　健治
稲葉　俊三・遠田　譲・梶原　哲郎

近年，食道癌に対する治療成績は向上し長期生存例もしばしば経験されるようになった．それに伴ない第2癌の発生の報告も増加している．今回我々は，食道癌術後挙上胃管に発生した胃癌を2例経験したので報告する．

症例1は，56歳男性．胸部食道癌で胸部食道全摘胸壁前食道胃吻合術を行った．術後10カ月目より嚥下困難，挙上胃管部腫瘤を認め，胃癌の診断で挙上胃管全摘胸壁前食道結腸吻合術を施行した．

症例2は，59歳男性．胸部食道癌で，胸部食道全摘胸壁前食道胃吻合術を行った．術後3年10カ月より嚥下困難，挙上胃管部腫瘤を認め，胃癌の診断で挙上胃管全摘胸壁前食道結腸吻合術を施行した．

本邦で報告されている食道癌術後挙上胃管癌は自験例を含め37例である．年齢は50～60歳代に多発しており，男性が92%をしめていた．再建経路は胸壁前が最も多かった．また胸壁前は切除率，予後からみても他の再建経路にくらべ明らかに良好な成績を示した．

17. X線解剖よりみた腸管位置異常の検討
—特に下行結腸を中心として—

（第二病院放射線科）
○石原　純一・佐藤　敬美・小泉真理子
高田ゆかり・福島佳奈子・山田　隆之

腸管位置異常については解剖学的に多くの検討がなされているがその対象は主として屍体におけるものであって生体におけるそれとは合致しないものもあるかもしれない．今回は過去2年間の日常X線診断業務の中で見出された下行結腸の正中側偏位と，これと左側腹壁との間に小腸が介在することを特徴とする“Persistent descending mesocolon”症例について小腸位置を指標とした検討を加えた．大腸検査総数703例中12例（1.7%）

が定型的であったが，さらにそれと類似しているが下行結腸の偏位がそれ程強くないものや介在する小腸の状況が異るものが16例見出された．後者ではdecubitus positionなど体位とも関連を有することが認められた．

18．当院における胸腹部救急CTの現状

（放射線科）
○樋口　睦・河野　敦・板橋　健司
岩崎　容子・扇　和之・大久保裕雄
高橋恵理子・柿木　良夫・三宅　裕子
上野　恵子・磯部　義憲・重田　帝子
（第2外科）
中川　隆雄・鈴木　忠・浜野　恭一

当院における夜間・休日の胸腹部救急CTは昭和61年10月に開始され，1年以上が経過した．今回我々は，現在までの検査結果およびCT検査の現状について報告する．昭和62年11月までの検査件数は46例で，内訳は外傷26例，大動脈解離または動脈瘤破裂の疑い11例，急性腹症6例，その他3例であった．検査部位は腹部32件，胸部9件，骨盤部3件，胸腹部2件で，造影CTは31例に施行された．

検査後，14例（外傷10，大動脈瘤破裂2，急性膵炎1，術後膿瘍1）に緊急手術が施行された．肝，脾，腎等の実質臓器損傷，出血の広がりに関して，CTの診断能は優れており，術前の情報提供に有用であった．逆に，CTの偽陰性例は外傷では腸管膜損傷，非外傷性疾患では腸管病変であり，CT検査の限界と思われる．

19．イレウスの腹腔鏡について

（第2外科・救急医療センター）
○中島　清隆・石川　雅健・村瀬　茂
中川　隆雄・鈴木　忠・浜野　恭一

イレウスの診断法としては，従来より腹部所見や腹部単純X線写真，生化学検査が重要視されているが，最近はそれに加えエコー，CTなども利用されつつある．しかしながら絞扼の有無や手術適応を判定するのに困難な症例は数多くあり，われわれはそのような症例に対して腹腔鏡検査を施行している．

われわれの用しているオリンパス製NCS針状腹腔鏡は外径が3.4mmと細く侵襲も少なく，簡便かつ安全に施行できる．

腹腔鏡を施行したイレウス49例のうち，絞扼性イレウスは11例で，絞扼腸管あるいは混濁・血性腹水の観察により絞扼の存在を容易に診断し得た．また単純性イレウスは38例で閉塞の状態や索状物の存在から，保存的治療の是非やイレウス再発の可能性についてある程度診断することができた．

以上のように，手術適応を判定するのに困難なイレウス症例に対し腹腔鏡検査は有意義であったので報告する．

20．遠隔操作式低線量率腔内照射装置（Selectron）の使用経験

（放射線科）
○喜多みどり・大川　智彦・秋田　雄三
前田　卓郎・宮路　紀昭・西嶋　博司
池田　道雄

1986年8月より本邦で初めての遠隔操作式低線量率腔内照射操置（Selectron）を導入し，主に子宮頸癌に対し臨床応用を開始した．アプリケーターはTAO式と異なり外筒が軽金属より成るため剛性である．線源は^{137}Cs Pellet（2.5mm径，40 mCi）で，本体内部に貯蔵されており，各症例毎に本線源とダミー線源の数および配置が任意設定可能である．本装置ではTAO式での線量分布（平均A点線量80～100cGy/hr）を基本とし，線源の組み合わせからA点の線量率を160～180cGy/hrと設定することとした．このため従来より短時間に1回の治療を終了することが可能となった．現在までの臨床経験を通し，線量率効果と本装置の有用性について報告する．

〔総説〕

呼吸機能からみた肺癌肺切除

（呼吸器外科）新田　澄郎

近年の呼吸器外科手術の主対象は肺悪性腫瘍，特に肺癌に対する肺切除療法である．

1920年代の肺癌肺葉切除術，1930年代前半の肺癌肺全摘術の成功以来60年を経た今日なお肺切除療法が肺治療の主体となっている．

この間肺切除適応については多くの試みがなさ